

連載

21世紀にふさわしい経済学を求めて

第17回

桑垣豊

(NPO 法人市民学研究室・特任研究員)

【これまでの連載（掲載ページへのリンク）】

[第1回](#) [第2回](#) [第3回](#) [第4回](#) [第5回](#) [第6回](#) [第7回](#) [第8回](#) [第9回](#)
[第10回](#) [第11回](#) [第12回](#) [第13回](#) [第14回](#) [第15回](#) [第16回](#)

- 第1章 経済学はどのような学問であるべきか（第1回から）
- 第2章 需給ギャップの経済学 保存則と因果律（第2回から）
- 第3章 需要不足の原因とその対策（第4回から）
- 第4章 供給不足の原因と対策（第6回から）番外編 経済問答その1
- 第5章 金融と外国為替市場（第8回から）
- 第6章 物価変動と需給ギャップ（第10回から）
- 第7章 市場メカニズム 基礎編（第11回から）
- 第8章 市場メカニズム 応用編（第13回から） 番外編 経済問答その2
- 第9章 労働と賃金（第15回から）
- 第10章 経済政策と制御理論（第16回から）

注：歴史の記述なので、ここからは文体を「ですます調」にします。

第11章 経済活動の起源

考古学の進歩により、文書に残っていない時代の経済活動の実態が見えてきました。一部、歴史学（文字資料）の成果もとりいれつつ、経済活動の起源にせまります。日本の例を中心に、中国、インド、メソポタミアにもふれます。

状況証拠しかない場合も多いですが、旧石器時代の流通網の可能性や、縄文時代の交換、弥生時代の加工業、古墳時代の布や米などの実物貨幣、飛鳥時代の貨幣発行政策などが、明らかになりつつあります。

日本の後期旧石器時代後半（2万9千年前～1万数千年前）には、長野県の高原地帯（鷹山遺跡など）で、黒曜石から石器をつくる専門集団が生まれています。石器と食料を交換していた可能性が高い

でしょう。移住生活をしていたため、流通網はほとんどなかったようですが、市場の芽生えが見えます。伊豆諸島の神津島へは遠洋航海によって、黒曜石採取にたびたび赴いていたことから、なんらかの流通網の存在もうかがえます。

縄文時代は定住が進んだため、黒曜石や塩など供給源に限られるものは、流通網を必要としました。新潟県系魚川産のヒスイは、広域流通していました。

弥生時代から飛鳥時代後半の富本銭(銅銭)と無紋銀銭発行までは、布や米などの実物貨幣が交換の媒体も兼ねていました。万葉集から、交換の場であった市のようなすがすがすがええすが、本格的に米作が始まった弥生時代にさかのぼるでしょう。それは同時に豊作のときの余剰米発生と貨幣化が関連し、需要不足の起源につながります。実物貨幣の存在は、少なくとも古墳時代には、さかのぼれるそうです。

7世紀末の藤原京(新益京:あらましのみやこ)以後は、都に官営市ができました。平城京では、東西それぞれ市司(いちのつかさ)という役職の元に価長(かちょう)を置き、物価調査官5名を任命していたことがわかっています。価格は、公定価格、半公定価格(沽価:こか)、自由価格の3つに分かれていました。物価調査結果に基づいて、沽価の水準を決めていたようです。

中国では、甲骨文字の解読が進み、貝貨は商(殷)王朝にはなかったことなどが判明しました。春秋戦国時代に金属貨幣が広まりますが、孟子には「一物一価」を否定する記述があり、すでに紀元前に均衡市場を非現実的とする認識がありました。

インドでは紀元前6世紀以前に金属貨幣が登場し、分業社会が進展します。その後、紀元前5世紀以後(いくつかの年代説がある)に出現した仏教は、新しい商人階層がカーストを超えた流通を目指したことから、その平等思想を受け入れ、多くの信仰を集めます。

メソポタミアでは、シュメール(当事の自称は「キエンギ」)文明が文字を生み出しますが、それは税金の記録として始まったようです。穀物などを壺に入れて税として集めましたが、壺の中身の穀物などの種類を表す表意文字と量を表す数字を組み合わせ、封泥に刻みしました。

新古典派経済学や西洋の歴史では見えにくい経済活動の起源を、日本とアジア各地の考古学と歴史の成果からさぐります。

11-1 日本の旧石器時代から古代まで

1) 前期旧石器時代

2009年、島根県砂原遺跡、板津遺跡(12~13万年前)で、前期旧石器時代の本格的遺跡がみつかります。石器の埋まっていた上下の火山灰層の年代から旧人類のものであり、ヨーロッパのネアンデルタール人、中央アジアのデニソワ人にあたることがわかりました。石器の流通があったかどうかは、不明です。旧石器時代は、移住生活で道具をもって移動するので、流通システムは不要かもしれませんが、何らかの流通品があった可能性はあります。

2000年に遺跡の捏造が発覚してから、4万年前以前の前期旧石器遺跡全体の存在が疑わしいものとなってしまいました。しかし、捏造事件以前から、捏造遺跡以外にも4万年以上前の遺跡が見つかり、砂原遺跡をはじめとして十数カ所の遺跡が見つかりました。19万年前から13万年前ごろまでの寒冷化(氷期)で朝鮮半島と九州の間の水路が細くせばまっていたときに、旧人類が冬凍結した海を日本列島まで渡ってきて、定住していたのは間違いありません。

【参考文献】

『旧石器が語る「砂原遺跡」 遙かなる人類の足跡をもとめて』

松藤和人、成瀬敏郎 ハーベスト出版 2014年

『日本列島人類史の起源「旧石器の狩人」たちの挑戦と葛藤』松藤和人 雄山閣 2014年

『人類進化の秘密のわかる本』科学雑学研究倶楽部編 学研プラス 2016年

2) 後期旧石器時代 黒曜石／サヌカイトの流通

後期旧石器時代は、3万8千年前ごろに始まります。大陸からわたってくることができるほどの海面低下があった最寒冷氷期はその後の2万年前ごろの数千年間ですから、日本列島にわたって来た現世人類は、遠洋航海をしたこととなります。丸太を削る技術はなかったので、草船か皮船でないかということですが、意外に石器が発達していて丸木舟をつくっていたかも知れません。それまでは、旧石器時代には遠洋航海をしていないことになっているので、大きな発見です。外国では、5万年前くらいにオーストラリアに到達した人類も遠洋航海しています。

後期旧石器時代前半（3万8千年前～2万9千年前）のはじめから、伊豆諸島の神津島（正確には近くの恩馳島：おんばせじま）へは遠洋航海によって、黒曜石採取にたびたびおもむいていました。なんらかの流通網の存在も、うかがえます。日本列島での旧石器時代の発見につながった群馬県岩宿（いわじゅく）遺跡では、3万5000年前くらいに磨製石器（石斧：せきふ）を使っていたことがわかり、旧石器時代の定義では存在しないことになっていたのも、これも大発見です。この磨製石斧で丸木舟をつくって、遠洋航海していたのかも知れません。

後期旧石器時代後半（2万9千年前～1万数千年前）には、長野県の高原地帯（鷹山遺跡など）で、黒曜石から石器をつくる専門集団が生まれています。石器づくりの労働に時間をとられることから、石器と食料を交換していた可能性が高い。移住生活をしていたため、流通網はほとんどなかったようですが、市場の芽生えが見えます。夏に石器の産地である中部高原地帯に行き、冬は関東地方に降りて行くという1年で100キロ以上の巡回を繰り返した例は確実です。

基本的には、自前（家族）で石器製作していたので、流通システムはほとんどなかったでしょう。石器は大陸と共通の製法も見られるので、広域流通していなくても、技術伝搬があったのは確実です。

縄文時代にも共通の問いですが、どのような石器流通の形がありえたでしょうか。候補を上げてみましょう。

●流通形態の候補

- 1 自分で持参し移動生活
- 2 バトンタッチ式に交換
- 3 同じ人が広域運搬する

季節移動で年間100キロ以上移動した例も多い旧石器時代人は、自分で道具を持ち歩いた「1」は確かですので、流通網があったとしても一部でしょう。ここまでで説明したように、後期旧石器時代後半には、石器の産地で交換して、移動していたのも確かです。

神津島の黒曜石は200キロ以上はなれた地点でも見つかっています。移動先で交換していれば、「2」「3」の可能性があります。黒曜石、サヌカイトは産地が限られるので、移住生活で自分で手に入れるのは無理です。別々の移住圏がかさなる地点で、交換していたと思います。それは、一部でもバトンタッチによる広域流通があったことを意味します。すでに述べた技術伝搬経路と同じかも知れません。しか

し、「2」のボタンタッチが本格化するのには、定住が前提になるので、縄文時代以後です。

「3」は移住生活のついでではなく、兼業でも運搬を専門にする人達を意味するので、縄文時代でもほとんどなかったかも知れません。人形峠に近い岡山県北部の恩原（おんばら）遺跡群は、標高730メートルあたりにあり、石器のタイプなどから東北から500キロ移動して移住してきたことがわかっています。これは「3」の広域運搬ではありませんが、集団移住が技術や文化を伝えたこととなります。しかも、無人の高原に移住（植民）してきたのです。

移住生活と定住生活とは、判然と区別できると思われるかも知れません。旧石器時代でも、後期旧石器時代後半になると、大型動物（マンモスやナウマン象など）が絶滅して中型動物（シカ、イノシシなど）が狩りの中心になるので、あまり広域移動しなくなります。ただし、遺跡が残るような定住跡は見つかっていません。

縄文時代は、定住と言っても季節移住はするので、年中同じところにはいない例が多そうです。ただし、住居の遺跡がたくさん見つかっているため、期間も数カ月と長く、住居も柱を立てるなど遺跡として残るしかりしたものになります。

日本列島の後期旧石器時代には、それまで新石器時代以後ということになっていた技術や現象がみつかっています。それをまとめておきます。

- ・遠洋航海
- ・磨製石器（局部磨製石斧）
- ・小型落とし穴
- ・環状集落

技術があるということは、それに見合った経済活動や文化があったということです。日本にあるのなら、世界中でも見つかるかも知れません。そうでないとすると、日本列島はユニークな文化・技術がいくつもあったこととなります。

後期旧石器時代、もっとも大きな海面低下があった最寒冷氷期は2万年前ごろの数千年間で、100メートル以上海面低下していました。深度130メートルくらいに、世界的に大陸棚がありますが、これは当時の平野の跡です。瀬戸内海も東京湾も陸でした。北海道は、大陸と樺太につながる半島でしたが、津軽海峡は存在しました。沖縄は、大陸や九州とはつながっていませんでしたが、いくつもの島がつながっていて大きな島になっていました。中国沿岸の広大な大陸棚も全部陸地です。今後の海底探査技術の進歩で、驚くべき海底遺跡が見つかるはずで、長生きしましょう。ただし、神津島と本州の間は、ずっと深く距離も数十キロあったので、遠洋航海していたのはまちがいありません。

地域の資料館や博物館で、一番はじめのコーナーは、ほとんど旧石器時代か縄文時代です。旧石器時代のコーナーは、石器が数点展示してあるだけのことが多いので、たいていの人が素通りします。でも、少し知識が身につくとおもしろくなってきます。ポイントは、石の材料と、どういう地形の場所でその石器が見つかったかです。地図がなく、遺跡名（旧小字名で名付ける）しか書いてないことが多いので、地図と照らし合わせてみましょう。

【参考文献】

『列島の考古学 旧石器時代』堤隆 河出書房新社 2011年

『旧石器時代ガイドブック ビジュアル版』堤隆 新泉社 2009年

『黒耀石の原産地を探る 鷹山遺跡群』黒耀石体験ミュージアム 新泉社 2004年

『旧石器人の遊動と植民・恩原遺跡群』稲田孝司 新泉社 2010年

『旧石器時代 日本文化のはじまり』佐藤宏之 教文舎 2019年

『旧石器考古学辞典 三訂版』旧石器文化談話会編 学生社 2007年

3) 縄文時代 定住／半栽培／日本語の語源

縄文時代は定住が進んだため、黒曜石や塩など供給源に限られるものは、流通網を必要としました。新潟県系魚川市産出のヒスイは、広域流通していました。千葉県銚子市のコハクも広域流通していて、発掘遺跡では中部地方で2つが重なりあっています。ヒスイに似たメノウは、石の値打ちはあっても希少性がなかったため流通しなかったようです。発掘は拠点集落からにみなので、集落に階層の違いがあることがわかります。また、集落でも身分の高い人がつけていた可能性が高く、縄文時代の平等性には疑問が生まれています。系魚川(姫川)のヒスイは全国、大陸までとどいています。

旧石器時代からつづく神津島の黒曜石の陸揚げ地点の見高段遺跡(伊豆半島)では、加工施設が見つかったので、分業はあきらかです。縄文時代の黒曜石の利用方法は、旧石器時代のように広くなく矢尻に限定するようです。しかし、定住し始めたとは言え、移動生活も共存していたので、産地から遠くに黒曜石が見つかる流通や交換があったかどうかは確かでないといえます。黒曜石を他の地域までもって行っても、周辺集落からは出て来ないことも多いといえます。このほか、アスファルトやサヌカイトなど様々なものが、何らかの流通をしていたのは確かなようです。写真は、「長野県立歴史館」にて購入した黒曜石のサンプル。産地は長野県内ながら歴史館とは離れた「黒曜石体験ミュージアム」付近で、採取は現代。



写真11-1 黒曜石

写真は、「長野県立歴史館」にて購入した黒曜石のサンプル。産地は長野県内ながら歴史館とは離れた「黒曜石体験ミュージアム」付近で、採取は現代。

縄文時代は、狩猟よりも採集が主で、栽培に近いことをしていたこともわかっています。それで、縄文時代を採集狩猟社会と呼ぶことがあります。中期の三内丸山遺跡(さんないまるやま:青森県)ではクリの遺伝子が、自然とくらべてそろっていることから、選別をしていたことはあきらかだということです。タネをまいていたのではないかと、という説もあります。土器は調理だけでなく、貯蔵用につかったこともコクゾウムシの痕跡からわかっていて、物資の蓄積もあったようです。

縄文時代は文献も金石文(石碑や金属器への文字の彫り込み)もないので、ことばの直接の手掛かりは、地名だけです。また、古代のことばをさかのぼったり、方言のちがいがから、縄文語をさぐることもできません。もっとも、古い日本語は地名から見て縄文時代にさかのぼるのは確かなようです。縄文時代にさかのぼるかどうかわかりませんが、今も使っている日本語から、経済活動の起源を考えて見ましょう。

【買う】

語源は「交う」で、交換すること。縄文時代からあったことばかも知れません。

【売る】

語源は「得る」で、モノを渡して貨幣を得ることか。はじめは、流動性の高い「米や布など」の実物貨幣を「得る」ことだったのでないでしょうか。その後、金属貨幣になります。今の感覚では、お金でモノを「得る」と思えるので反対のような気がしますが、新しく登場した金属貨幣を手に入れることに意味があったとすると、「得る」で納得できます。実物貨幣とともにできた「ことば」だとすると弥生時代、金属貨幣のときだと飛鳥時代になります。

【参考文献】

- 『縄文の資源利用と社会』阿部芳郎編、季刊考古学・別冊21 雄山閣 2014年
 『タネをまく縄文人 最新科学が覆す農耕の起源』小畑弘己 吉川弘文館 2016年
 『黒潮を渡った黒曜石 見高段間遺跡』池谷信之 新泉社 2005年
 『縄文語の発見』小泉保 青土社 1998年

4) 弥生時代 ガラス・青銅・鉄の流通／水田稲作

水田稲作のはじまりをもって弥生時代とします。中国大陸で長い時間をかけて完成した灌漑施設をともなう水田稲作が日本に伝わり、はじめから本格的な水田稲作が展開します。一枚の田の面積は非常に小さいですが、採集狩猟社会から農耕社会への大きな転換点となりました。

稲作は、福岡県から近畿地方までは比較的順調に広がりますが、その後は徐々に青森県まで届きません。秋田県には、日本海沿いにすばやく稲作技術が届きますが、しばらくして一旦やめてしまいます。奈良盆地では、はじめに中央部の唐古鍵(からこかぎ)遺跡に稲作技術が届きますが、周辺に稲作が広まるにはしばらく時間がかかります。縄文文化と弥生文化がそれほど争うことなく、共存する時代がありました。北海道と沖縄では、採集狩猟社会が続きます。

後期には、今の市や郡の範囲でクニをつくっていた可能性が高く、戦(いくさ)がはじまったようです。富の蓄積は進み、税の起源(クニのオサへのみつぎもの)も弥生時代でしょう。クニの中の流通網、クニどうしの交易、日本列島外との交易もありました。米や布の貨幣化はまだ確認できません。

大阪府八尾市にある弥生時代の亀井遺跡(西暦ゼロ年ごろ)からは、分銅(石製ながら)が見つかっています。もともと用途不明の発掘品だったのですが、数個の重さが2倍2倍の等比数列になっているのがわかり、天秤で重さを計るのに使う石製重りだと判明しました。使い道は、顔料を調合する工業か、市で貴重品の取引に使う道具なのかよくわかりません。ただ、この遺跡は後の時代の市の場所に近いので、もしかしたら弥生時代すでに市があったのかも知れません。亀井遺跡は跡部(あとのくべ)地区ととなりあっていて、古代三市の一つ阿斗桑(あとのくわ)市の候補地です。今ある跡部神社が関係あるかも知れません。古代豪族の物部(もののべ:製造業)氏の本拠地も近くです。



写真11-2 跡部神社

土器の多様性から、縄文時代に比べて文化や生活方法の多様性が大きかったことがわかっています。1カ所の遺跡から、遠くの産地でできた土器がたくさん見つかるので、思ったよりも交易、技術移転、移住はさかんでした。関東地方の中里遺跡(小田原市)から、兵庫県摂津地方のタイプ、愛知県尾張地方のタイプの土器が見つかっています。

ガラス、鉄、青銅などの原料の製造(精錬)はできませんでしたが、再熔融でリサイクル加工していたことはわかっています。中国の風鐸(ふうたく)がモデルになったという銅鐸は、各地で祭祀用の楽器から、見せるための威信財になったようで、大型化します。狩猟用だった弓矢は戦の主力兵器にもなります。矢尻の量産体制もできたことでしょう。生産の専門化、流通網も進んだでしょうが、今の考古学ではそこまでわかりません。

国立歴史民俗資料館の年代測定法の研究で、弥生時代は3000年前までさかのぼることが確実にな

りましたが、まだ論争中です。その結果によっては、流通や分業、農業や戦のはじまりの時期も早くなります。今まで同時に大陸から伝わったことになっていた水田稲作と鉄器は別々で、3000年前に水田稲作、2500年前ごろに鉄器が伝わったことになります。

【コラム】海幸彦(うみさちひこ)と山幸彦(やまさちひこ)

古事記や日本書紀に出てくる神代(神武以前の部分)の神話の中にある話です。古事記などは、神々の系譜の中に、海幸彦と山幸彦の話をはめこんでいますが、独立した説話でした。インドネシアにもこのような話があるそうです。

海の民と山の民が、それぞれの仕事を専門にしていた分業をあらわしています。物語りには出てきませんが、海の民と山の民で産物を物々交換していたのだと思います。個人どうしてなく、「村(集落)単位」ではないでしょうか。交換物も「複数の産物をセット」にしてしていたと思います。物々交換のイメージとして、1人对1人で、それぞれ一つの物を交換していることが多いですが、それでは取引はなかなか成立しない。なかなか成立しないから、物々交換から貨幣による取引に移行したという説が教科書に載っていたりしますが、なかなか成立しなかったら原始的な社会でも続けるのはむずかしい。

物語りでは、兄弟で生産手段(資本)である釣り針と弓矢を交換して仕事を入れかえますが、いずれも仕事はうまく行きません。これは、仕事に専門性がある、短い時間で身につけることができないことを表しています。兄の海幸彦は弓矢を返しますが、弟の山幸彦は釣り針をなくしてしまいます。山幸彦は、剣を鑄潰して釣り針をたくさんつくって返しますが、元の釣り針を返せと断られます。

物語りでは弓矢はそのまま返していますが、痛んでも地元の材料と技術なので直したり、一から作り直したりしたら、同じ性能のものが得られるのではないかと思います。釣り針は、鉄製です。日本では、古墳時代の途中まで、原料から鉄をつくることはできませんでした。弥生時代から大陸の鉄製品が入ってきて、鍛え直して別の製品(鍛造品)をつくることはできました。古墳時代はじめからは、鉄の原料(鉄錠:てつてい)も入ってきましたが、鍛造に加えて溶かして鑄直す(鑄造)ことまでしかできませんでした。

そうするとこの物語りは、弥生時代(鍛造)までさかのぼれる可能性があります。縄文時代までは、石や貝で釣り針をつくっていたので国産です。なくしたから大変だ、ということにはなりません。古墳時代後期に鉄鉱石から精錬できるようになりますが、これは吉備国(きびのくに/岡山県)などで産出する鉄鉱石から精錬して原料を得ました。少し遅れて砂鉄も原料にしますが、この時代の精錬設備は、箱型炉や堅型炉です。高殿を設け、砂鉄を原料にする「たたら製鉄」は江戸時代に成立します。「たたら製鉄」は、司馬遼太郎『砂鉄のみち』が古代、宮崎駿『もののけ姫』が室町時代を想定していますが、さかのぼりすぎています。

物語りは、その後、海の底の国に釣り針をさがしに行くことになりますが、浦島太郎の元になったように、別の物語りをつないでいるのではないかと思います。

【参考文献】

『弥生時代の歴史』藤尾慎一郎 講談社現代新書2330 2015年

『南関東の弥生文化 東からの視点』大阪府立弥生文化博物館(展示図録) 2022年

『たたら製鉄の歴史』角田徳幸 吉川弘文館 2019年

『全現代語訳 日本書紀(上)』宇治谷孟訳 講談社学術文庫833 1988年

元は、奈良時代の720年成立で、書名は「日本紀(にっぽんぎ)」。平安時代から「日本書紀」とよぶ。

5) 古墳時代 米と布の貨幣化

中期の5世紀に市が発生したようです。5世紀末の雄略天皇の時代に、秦氏が大蔵にみつぎ物を収めることから、大蔵(省)が始まります。現代で言えば、町中でときどき見かける税の現物納入品を収める保税倉庫です。農産物や織物などの現物で税を収めるので、すべて必要なものが必要な量確保できるわけではありません。そこで、交換のための市が必要になります。流通の要である港や道路の交差点(ちまた)に、市ができます。少し時代が後かも知れませんが、万葉集に、布や米を持って行って必要なものと交換し(買い)に行く状況を歌ったものがあります。米、布、絹糸、鉄などが貨幣の役割を果たしていました。

古墳の建設のために巨石(石棺)を運ぶ流通経路が必要でした。畿内の古墳のために、熊本のピンク石を有明海や瀬戸内海と陸路で運んでいます。兵庫県加古川市には、石乃宝殿(いしのほうでん:写真右側の岩が石棺)という不思議な岩をまつた神社があります。大きな岩から石棺を切り出しかけたままになったように見えます。ここは古墳に使う立田石の産地です。律令時代の大道(おおみち)の原型はこのときにできたのではないのでしょうか。律令時代の大道とは、幅が10メートルもあり、なるべく直線で作るといふ当時の経済力からすると、無謀な公共事業です。次第に全国を傘下に収めつつあった大和政権は、このような流通網を使って、税の収集と軍隊の移動をしたのでしょう。陸上には各地に大溝(おおうなて:運河)もできます。



写真11-3 石乃宝殿

一方、古墳の周濠は灌漑技術の延長であり、はにわの生産は焼き物の大量生産につながります。これを請け負ったのが土師(はじ)氏ですが、後に古墳が廃れる奈良時代に菅原氏(一族の出身地名:大和西大寺近く)に名前を改めています。優秀な官僚として出世して、税制改革に取り組んだ菅原道真是その子孫です。一族としての方向転換に成功したのです。

【参考文献】

『渡来氏族の謎』加藤謙吉 祥伝社新書510 2017年

『古墳時代ハンドブック』若狭徹 新泉社 2013年

『古墳時代の生産と流通』和田晴吾 吉川弘文館 2015年

6) 飛鳥時代 律令制／古代の市／富本銭の発行と藤原京建設

大化改新はあったか、なかったか。班田収授や大道建設、条里制の実施などはいつ始まったか。歴史学、考古学はまだ論争中です。645年の蘇我政権打倒のクーデター(乙巳の変:いつしのへん)以後、すぐにはじまったという説が否定されましたが、今は結構早く始まったという説も有力になりつつあります。なんらかの制度刷新がクーデター後に始まったのは確かです。それは、蘇我氏4代が大臣(おおおみ)として進めて来た政策の最終段階として、律令制につながる国家システムの構想を、孝徳天皇、中大兄皇子(のちの天智天皇)らが横取りしたようです。しかも、新自由主義顔負けの現場無視の強引な実行で、相当反発がありました。それが大海人皇子(おおあまのおうじ:後の天武天皇)による672年の壬申の乱(じんしんのらん)にもつながったのでしょう。

古代以来の呪文に「急急如律令(きゅうきゅうによりつりょう)」というのがあります。これは、律令(古代の法律)の命令のように急げという意味です。ただし、元の意味をすぐに失って、魔よけの呪文になりま

す。筆者には、小泉元首相の「改革なくし成長なし」のキャッチフレーズのように聞こえます。日本は、中国の大国「唐」からの攻撃にそなえて、律令制の導入で防衛体制と生産力増強を急いで実現しようとした。外国を手本とする強引な改革に、共通性を感じます。当時の日本は、中大兄皇子の元で、朝鮮半島情勢に介入して「白村江の戦い」を起こして唐と敵対し大敗北します。

壬申の乱で政権をうばった天武天皇政権は、682年に銅銭である富本銭（ふほんせん）を発行します。藤原京建設で建設労働者などへの支払いに貨幣が必要になったのが理由のようです。それと対になるのが公設市で、銅銭が使える場所が必要です。市のためには物流網も必要です。これらをセットにして、渡来人の力を借りてしくみをつくったのでしょう。銅銭ともに、銀銭（無紋銀銭）も流通していましたが、無紋銀銭を通貨として発行したのか、銀の塊が米や布と同様現物貨幣として流通していたのかは定かではありません。ただし、政府は銅銭の発行とともに銀銭の発行を禁止しています。いきなり、銅銭を今のように強制通貨にしようとしたようですが、うまく行かなかったようで、すぐに銀銭を許可します。銀銭で価値の裏付けをすることで実効性を持たすしかなかったのでしょう。銀銭使用禁止で富本銭の発行益もねらったでしょうが、富本銭は暴落したか、まったく流通しなかったのでしょうか。

飛鳥政権は、708年和同開珎（わどうかいちん／わどうかいほう）を発行します。富本銭十文を和同開珎一文としました。10倍のデノミ（通貨単位の変更）です。発行益による平城京建設費と捻出の労賃の支払いが目的でしょうが、和同銀銭も同時に発行したようです。和同開珎は偽銭（私鑄銭）が横行したようで、価値は銅の価値に下落したようです。ちなみに、銅銭の製造原価は、銅銭の額面の3分の一くらいだったので、物価が3倍になると政府の発行益はなくなり、偽造のメリットもなくなります。製造する前の銅の価値は、そのまた3分の1とすると、額面のだいたい10分の1になります。

貨幣の流通範囲は、飛鳥時代が都の周辺のみ。奈良時代は、都の周辺と各国の国庁（今の県庁にあたる）の周辺。これをもって、日本では金属貨幣の本格的な使用は、宋銭の入ってきた平安末期だという説があります。本格的な使用でなくても、流通して機能していたのですから、貨幣の歴史としては大事です。特に富本銭の導入は日本初なのでおもしろく、同時に銀銭を発行したり禁止したりして模索が続きます。私の説は都の建設労働力確保ですが、建設した物は資産として残るので後々効果を得られますがコストははじめの数年です。臨時労働（賃金）と資産形成が貨幣の役割だと考えると、現代に通じるものがあります。

律令制は、どうして急速に実現したのかという大きな疑問があります。まず一つ目は、各地の豪族の土地を取り上げて国有化し、かわりに地位に応じた報酬を支払うことにしたことです。高い地位にある場合は、特定の広い土地を指定してそこからの収穫を報酬にします。ただし、土地の持ち主は国家にある建前です。郡単位を支配していた地方豪族は、郡司（ぐんじ：郡の長官）に任命して実質的な支配関係を温存することで、制度変更を受け入れさせたようです。地位の高い有力豪族は、結局土地の私有を認めます。実は、唐の律令制では、有力者の土地私有と国家の土地所有の二本建てだったので、日本の導入当初は全国土の公有という原理主義は行き過ぎでした。

もう一つは、人民に一律に農地を班給する班田収授法（はんでんしゅうじゅのほう）を実現するためには農地の区画整理が必要でした。西日本を中心にその痕跡の残る条里制は、その名残ですが、近代の農地整理に近い長方形の区画を整然とつくりました。しかし、これは重機のない時代には途方もない労力が必要で、高度な測量技術、土木技術も要します。先祖伝来の複雑な農地の区画を全面的に作り直すのですから、心理的抵抗も大きかったはず。導入できたのは、恐らくこれによって、農業生産力が大

幅に増えたからではないでしょうか。朝廷に協力的な地域で実験的に区画整理事業を展開して、高い生産性を見つけたのではないかと。

出挙(すいこ)という種籾の強制貸し付けがありました。これは優良品種の普及になりました。ただし、利子は年利100%で「倍返し」が必要でした。稲は、1本の稲からたくさんの種(米籾)が取れるので、倍返しはそれほど負担ではなかったようです。特に優秀な品種を貸すのですから。ところで、キリスト教やイスラム教は利子を取ることを禁じていますが、成立当時麦からとれる種の数(増殖率)が少なかったため、利子がとりにくかったという説があります。そうすると利子を取るかどうかは、思想の問題かも知れませんが、もともと実際的な意味があったことになります。

ちなみに、シュメール文明(5000年前~4000年前)では、利子を取るのが普通でした。当時の麦などの農産物の種からの増殖率が高かったからだ、ということです。くわしくは、世界の経済活動の起源のところで説明します。

【参考文献】

『大化の改新と蘇我氏 敗者の日本史I』遠山美都男 吉川弘文館 2013年

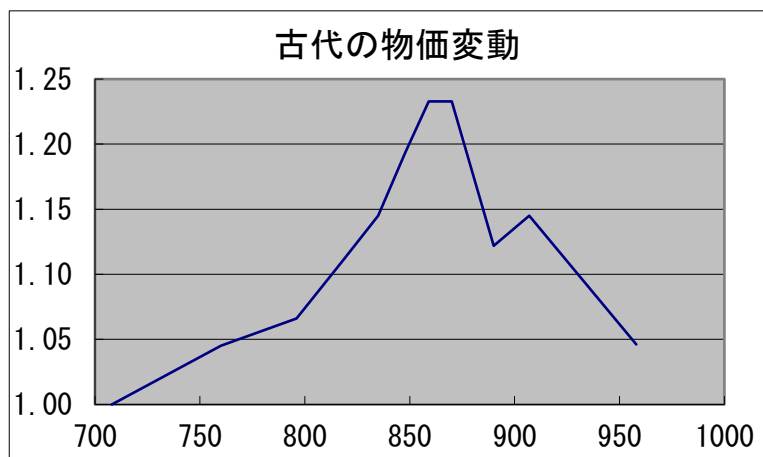
『古代の都市と条里』条里制・古代都市研究会編 吉川弘文館 2015年

『日本古代貨幣の創出』無紋銭銀・富本銭・和同銭 今村啓爾 講談社学術文庫2298 2015年

『古代道路の謎 奈良時代の巨大国家プロジェクト』近江俊秀 祥伝社新書316 2013年

7) 奈良時代 貨幣の発行／律令制の浸透

和同開珎をはじめとして、12回にわたって新規に銅銭を発行します。それを皇朝十二銭と言います。そ



縦軸：物価の年間上昇倍率 横軸：西暦年

図11-1 皇朝十二銭の発行間隔から物価変動を推定

その後、皇朝十二銭は、1回を除き10倍の交換比率(物価10倍)で新銭の発行を10回繰り返します。デノミです。その10倍を発行間隔年で累乗根して、年率のインフレ率を推定してみました。例えば、3年で8倍(2×2×2)になれば、1年で物価は2倍(+100%のインフレ)になる計算です。グラフでは、その通貨と次の通貨発行の真ん中の年を頂点としました。

これは極めて大ざっぱな推定です。

8世紀は奈良時代ですが、大仏建立や各国に国分寺をつくったり、恭仁京や

紫香楽宮に遷都したりします。その間、物価上昇率が上がって行きます。平安時代がはじまる9世紀から一段と物価上昇率があがります。平安京の造営が続き、東北での戦争が支出を増やしているのですが、むしろ9世紀の後半、20%にもおよぶインフレになります。あとで述べるように、制度の欠陥から税収が得にくくなり、通貨増発による貨幣発行益で補っているようです。その後、道真たちの改革がうまく行ったのか物価上昇率が下がります。

新貨幣を10倍の価値で発行しても次第に価値は下がりますが、旧通貨も同時流通し、さがり切った

くつもの旧通貨の価値はそのまま、やがて現行通貨も同じ価値になったようです。ただし、鉄銭で発行したりして地金の価値を落とすことでコストを押さえ、発行益を確保しようとしていました。本格的な貨幣流通ではなかったという説がありますが、都市を中心に結構流通したと思います。本格的かどうかを問題にするのではなく、どの地域でどのような使い方をしたかをくわしく分析する必要があります。

新規発行は、10世紀で終わり、平安時代末期に宋銭が入ってくるまで残りの通貨と米や布などを併用する時代が続きます。筆者は、銅資源の枯渇が原因ではないかと思います。後醍醐天皇が通貨発行をもくろみますが、すぐに政権が倒れてしまいます。結局、江戸時代の寛永通宝まで、強制通貨である銅銭は発行できませんでした。同じく暦も、平安時代から江戸時代まで改暦しないで誤差が蓄積していきます。

7世紀末の藤原京(新益京:あらしのみやこ)以後は、都に官営市ができました。藤原京には北側に市があったようで、中市(なかいち)という名前だった可能性があります。写真は、筆者が中市跡ではないかと思う市杵島神社です。5世紀からあった軽市(かるのいち)は後の藤原京の西市にあたる場所に近かったので、事実上藤原京の市として機能したでしょう。今の近鉄「橿原神宮前駅」(奈良県橿原市)のすぐ東側にありました。



写真11-4 市杵島神社(中市跡)

平城京では、東西それぞれ市司(いちのつかさ)という役職の元に、物価調査官(価長)5名を任命しました。価格は、公定価格、半公定価格(沽価:こか)、自由価格の3つに分かれていました。物価調査結果に基づいて、半公定価格の水準を決めていました。市で売り買いをした人を市人(いちひと)といいます。許可制だったようです。許可なく立売(たちうり)する者もいた記録があります。買う方は身分を問われなかったようです。盗難品の捜査の記録もあります。人が集まるので刑罰の場でもありました。

奈良時代は木簡での事務処理だったので、後の平安時代よりも日常事務の記録が残りやすいのです。長岡京も木簡行政でした。木簡は飛鳥時代の後半からはじまります。正倉院文書は紙の文書で、税務記録(正税帳、計帳など)が残っていますが、30年保存なので、裏紙を東大寺写経所の事務記録に使いました。写経は国家事業だったので、細かい記録をつけました。勤務評定、文字の練習、手本の經典の貸し出し記録、墨・筆・紙の管理、食事の手配、労働条件改善の申し入れ書など、手にとるように仕事の様子がわかります。仕事の差配などの管理職が常勤の職員で、実際に写経をしたのは文字のわかる庶民のアルバイトでした。



写真11-5 太宰府都楼府跡

写経所での給料は米などの現物支給だったので、それを生活物資にかえるために市が必要でした。貨幣で賃金をもらう労働者は、貨幣が使える市が必要です。また、役所や寺社も、税金や貢ぎ物を必要な物資にかえる市が必要です。藤原京で、官営市と貨幣が、セットではじまったと思います。歴史学者はそこまで断言しませんが、市と貨幣の機能を考えると、かなり必然性があります。

奈良時代の墓から、土地取引がわかる買地券が出土しました。親の墓をつくるための土地を手に入れるために、銭・鍬・絹・布・綿と交換したという売買証明記録（買地券）です。この墓から出土しました。出土地は、福岡県の太宰府の都市域です。銭以外に、鍬・絹・布・綿が実物貨幣の機能を果たしていたことがわかる貴重な記録です。太宰府には、後の時代に菅原道真が左遷されます。写真は、太宰府の政庁（都楼府：とろうふ）跡です。

【参考文献】

- 『流通経済史』桜井英治、中西聡編 山川出版社 2002年
 『平城京に暮らす 天平ひとの泣き笑い』馬場基 吉川弘文館 2010年
 『正倉院文書の世界』丸山裕美子 中公新書2054 2010年

8) 平安時代 人頭税から土地税制に変更（藤原時平、菅原道真）

海上の道として、九州玄界灘の沖ノ島を中継地点として、博多を回避して大和と大陸を結ぶルートがありました。このルートは、海の民「宗像（むなかた）氏」の縄張りです。古墳時代からありました。博多一壱岐島は、地元九州の勢力圏にあり海の民「阿曇（あづみ）氏」の縄張りです。大和朝廷はこれとは別のルートを確認していたのです。沖ノ島の女神のひとりイチキヒメが、なまって巖島神社となり、船旅の守り神になります。市の語源も神を祭るイツクから来ているようですが、イチキヒメもイツクから来ています。写真は、沖ノ島と九州（宗像大社）の真ん中にある大島から沖ノ島を望む遥拝所。沖ノ島は曇っていて見えませんでした。



写真11-6 大島の沖ノ島遥拝所

平安京の東市を祭った姫寺の後身は、もともとの巖島神社がなまって、今の市比賣（イチヒメ）神社になりました。市比賣神社は、平安時代の東市のあった大宮七条（龍谷大学大宮キャンパス敷地付近）から東北東に2キロ程度移動していますが、現存します。七条通りには今も商店街がありますが、古代の市に近い場所です。西市は、平安京の建設（都の造作）が資金不足で中断したので都の西半分は人口が定着せず、利用者が確保できませんでした。短い期間で廃止します。

9世紀は班田収授が機能しなくなり、税収不足が深刻化します。讃岐の国司に赴任した菅原道真が見た実態は、戸籍の届け出に男子を女子に偽ることで税を逃れるなどの節税が横行していました。これらの実態を見たことを生かしたのか、後に菅原道真は右大臣として、左大臣の藤原時平とともに、人頭税から土地の持ち主から税をとるように税制を大きく変えます。中世的な税になったとも言えます。これは100年ほど前の唐が玄宗皇帝の時代に、税制を土地税制（両税法）に改革したことを道真が知っていたからかも知れません。また、国司頭（こくじのかみ：現代の知事）の受領（ずりょう）化で権限強化し、税の徴収の動機を持たせます。受領は、地方受け取り分（経費）の天引きが可能になりました。

しかし、徴収力増大の一方、税の横取りが横行します。正倉（しょうそう：徴収した米を収める倉庫）の火災が頻発（空で燃やして）し、中央政府への支払いをしぶる例が出て来ます。有力貴族が一族を受領として送り込み、利権を確保する手段になります。時代はだいたい後になりますが、平家一族も、軍事力とともにこの利権で勢力を拡大します。武家政権につながります。

律令制の空洞化は、なぜおきたのでしょうか。律令制による農業生産力の増大は、各地方が技術を身につけることで、中央政権に頼らなくてもよくなったからではないかと思います。律令制が広がった理由がそのまま、衰退の理由になったのかも知れません。

菅原道真の失脚は、結果として税制改革の手柄横取りになりましたが、横取りを意図したものかどうかはわかりません。藤原時平との仲は悪くなかったようなので、藤原氏にとって菅原家がじゃまであったので、一族の意向である可能性があります。あるいは、実力はなくても参加すれば出世できる遣唐使を中止したのが、多くの貴族の反発を招いたのかもしれない。道真は多くの貴族の遣唐中止の意見を代表しただけということなので、今のところ、失脚の原因は明確にはわかりません。

西暦900年ごろに技術が中央に依存しなくても各地に定着し、税制が変わり、地方長官（受領）の権限が強くなって、地方分権的な社会への移行がはじまりました。古代のおわりが見えてきます。

【コラム】方略試（ほうりゃくし）と管家廊下（かんけろうか）

貞観12年（860年）、菅原道真（845-903）は国家公務員（上級）採用試験、当時のよびかたで方略試を受けます。口頭試問で2問。「氏族についてあきらかにせよ」「大地震（おおなみ：oonawi）について述べよ」。道真の答えが記録に残っていますが、2問目の解答は、「大地震はいかんともしがたいので、人間の力ではどうしようもない」（要約）。この前の年に、「貞観の大津波」が東北地方太平洋岸に押し寄せたことは、東日本大震災以来、多くの人の知るところとなりました。方略試には時事問題がでたようです。この時期は、都の周辺でも大地震が相次ぎました。「大地震はいかんともしがたい」は時代の制約ともとれますが、地震の多い日本列島に原発はつくれないという現代の戒めになります。

その後、道真は順調に出世して、平安朝の財政改革を成しとげただけでなく、『日本三代実録』や『類聚（るいじゅう）国史』の編集にも加わっています。『日本三代実録』は「日本書紀」から始まる「六国史（りっこくし）」の最後の正史。『類聚国史』は、『日本三代実録』以前の正史を内容別に分類して、時代順に並べたもので、総索引のようなものです。しかも、本文を書き写すときに、元の文章を直そうとするのを知って、原文のまま写すように指導したそうです。捏造が横行する現代の科学者に聞かせてあげたい。

道真の屋敷跡は、管大臣（かんだいじん）神社になっていますが、当時、多くの貴族たちがこの屋敷に集まってきて議論をたたかわせたということです。場所は、京都の四条烏丸南西の新町高辻西入る。平安時代、個室というものがなかったので、大きな屋敷の立派な廊下にたむろして話をしていました。これを称して「管家廊下」といいます。

【参考文献】

- 『消された政治家 菅原道真』平田耿二 文春新書115 2000年
- 『摂関政治と菅原道真 敗者の日本史3』今正秀 吉川弘文館 2013年
- 『律令国家の転換と「日本」』坂上康俊 講談社学術文庫 2009年

【予告】

今回は、世界各地の経済活動の起源を、メソポタミア、中国、インドにさぐります。